

中学生と古典との出会いをめぐる一提案

——「死」との出会いを意識した授業開発の実践——

竹本 正子

1 はじめに

中学生にとって、古典の世界は未知の世界である。「今から千二百年前のお話」といわれても、自分を取り巻いている実際の世界や生活と何一つ結びついてこない。しかも言葉遣いが現代と異なることで「外国語」に近い感覚を感じている。「古典」は難しく、わからないもの、しかも自分たちの生活には直接かわってこない時代のことであり、学ぶ意義や必要性を感じない。多くの中学生は古典をそのような捉えているのではないかと思われる。

しかし、古典をこのように捉えさせてしまつてよいものであるのか。新学習指導要領の中でも「古典に親しむこと」「伝統的な言語文化に親しみ、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつなぐこと」「いくこと」が明文化されている。古典を学習者にとって身近な文化言葉として捉えさせ、親しみを持たせることが求められているのである。それに加えて「もの考え方」を身近に引きつけることができないものであろうか。昔の人が考えていることを知る、そしてそ

れが自分たちの今の生活とかけ離れたものではないこと、自分たちの生活や思考のベースになつていくものであることを感じること、自分たちの生活を見つめ直すきっかけにもなるのではないか。そのような教材として古典と学習者をつなぐことができればと考えた。

2 「死生」を考えさせる場面としての古典

我々を取り巻く問題の根源に「死生」の問題がある。それは人として、生きているものとして必ず避けては通れない問題である。誰もこの問題を軽く考えてはいないし、心密かに心配したり悩んだり恐怖を感じたりしているのである。しかし、学校教育の場でこの問題を正面から取り扱うことに、多くの指導者が抵抗を持っているのが現状である。「死」を語ることはタブーであり、忌むべきものとしてしか捉えられない。確かに死は恐ろしい。できれば避けたいのに、決して避けることのできない問題であることは明白である。しかしその問題を正面から捉え、考え、語り合う機会はない。一人で

悶々と思ひ詰めるしかないのが現状である。

学習者にとって、自己内対話を引き出すためのテキストとして古典が意義づけられること、またその自己内対話の最も根源的なものが「死生」にかかわるものであり、それが自らにとっても身近な問題であると認識することは大変重要なことである。古典教材の中には「死生」を扱っているものが多く、古典教材に触れることはすなわち「死生」を考えることにもつながっていく。「死」と「生」は表裏一体であり、「死」を語ることは「生」を考えることでもあること。それは昔から今に至るまでずっと考えられてきた問題であること。決して今だけに限定した問題ではない、自分だけの問題でもない、みんなが同じように悩み考え続けてきた「永遠の問題」であること。よく生きるためには「死」を意識した生活を送る必要があることに気づくこと。古文教材を学習することでそうした点に気づき、意識し、前向きに考えていく生き方をさせていきたいと思う。社会現状を鑑みてもそうした生き方が今後強く求められていくのではないかと考えている。

3 「死生観」を意識した学習の現状と方向

では、具体的にどのような学習者と「死生」と出会わせ、向き合わせ、それを自分の問題としてとらえさせることができるのであろうか。

そもそも「学ぶ」ということをどのようにとらえればよいのであろうか。

「学び」とは「自分自身で考えること」であり、「自らの手でつかみ取るもの」でなければなるまい。そして、そうして手に入れた「学び」は多くの場合自らの「生きる力」として身に付いていくものである。「死生」との出会いはこのように、自らが考え、自らの手でつかみ取るものでありたい。死生観は決して人から押しつけられたり人の考えを鵜呑みにしたりできる問題ではないし、そのようにしてはならない問題である。自らが感じ、考え、納得するまで反問を繰り返す、そうした過程の中で、課題と向き合わせたいものである。

そのためには課題と出会わせるための学習形態に工夫が必要である。本校では「学びの共同体」を意識した学習の方法を模索している。これは、これまでの「一斉授業」の形態を見直し、学習者自身を「つなぐ」ことによって学力を向上させようという取り組みであり、「学力」は基礎から積み上げて形成されるものではなく、逆に上から引き上げられて形成されていく。学力を形成するためには、自分のわかる（できる）レベルにもどって積み上げてゆくのではなく、自分のわからない（できない）レベルの事柄を教師や仲間とのコミュニケーションをとおして模倣し、それを自分の中に「内化」することが必要であるという考え方に基づいた取り組みの一手法である。

生徒たちは入学以来、各教科の指導の中で、少人数による「学びの共同」を行ってきた。自らの考えを、「小グループ」↓「全体」で表現し、教え合い、理解を共有する指導を繰り返してきている。国語の学習においても他者の意見を聞き、自らの意見を表出する中で、考えの多様性に気づき、自らの思考を深めていこうとする姿勢

がみられようになつてきている。テキストの中にあるものの方や考え方を、自分の持つている言葉を用いて精一杯表現しようとし、仲間との「学びの共同」の中で、「わかった」「そうだったのか」と感じることも少なからずあるようである。また、小グループの活動の中で「なぜそう思うのか」「どこからそう感じたのか」といった反問が繰り返されるうちに、テキストとの対話も深まっているようである。こうした様々な形の対話の中から生徒の「学び」が深まっているように思われる。

4 授業の実際（竹取物語を用いた実践について）

「死生」を意識した学習を考えると、教材としてどのようなものを用いるかというのは大きな問題である。古典作品にはすべて「死生」が内包されているとはいえず、中学生が読んでその内容を理解できる作品には限りがある。

次に示すのは、「死生観」との出会いを意図した学習の一例として授業実践したものである。教材は教科書掲載の「竹取物語（蓬莱の玉の枝）」であるが、教科書に掲載されていない「昇天」の場面を教材として用いた。かぐや姫の「昇天」の場面は、そこに「死」が内包されており、その「死」の世界とそれに対比する形で「生」の世界が描かれている場面である。そこには書き手である作者の「死生観」が示されており、時代を超えた現代の読み手にまで「死生」の問題を問いかけている。中学生にとって「竹取物語」は単に「かぐや姫の物語」としてしか捉えられていなかったであろうが、この

「昇天」の場面を学習することで「永遠の命と有限の命」について考えることを突きつけられることになるのではないか。「永遠の命」を持つことのできない我々が、ではどのような気持ちで生きていけばよいのか、「死」が必ず訪れる人生の中で何を大切に生きていけばよいのかといった問題を考えさせていくことができるのではないかと考えた。そうした作品との出会いを通して、自分の「死生」について考え、他の作品に内包された「死生」についても意識して読み取ることができるようになるのではないかと考えた。

○本時の目標

- ・ 古典世界と現代世界の死生のとらえ方の異同を確認し、その差があまりないことを知る。
- ・ 古典世界が投げかけている「情愛」の問題が現代社会にも通用する問題であることを知る。

○学習展開

- ・ 次頁の表のとおり。

学習展開

	学 習 活 動	指導上の工夫・留意点	評価規準・評価方法
導 入	1 前時の学習を想起させる。 2 「かぐや姫の昇天」を音読する。	○「天の羽衣」「不死の薬」の意味を確認する。 (誰が・何のために持ってきたのか) ○グループで音読。 ○斉読。	関 前時を思い出し、積極的に発表しようとしている。(観察)
展 開	3 「天の羽衣」の持つ意味を考える。	○「天の羽衣」を身につけるとどうなってしまうのか。 「物思いがなくなる」(心異になる) 〔「心異になる」という一言によって、天上と地上が分けられていることを確認する。〕 ○天人の価値観を確認する。 〔「地上はきたない」「天上はきれい」〕 天上は永遠の命を保証された場所であり、地上は「汚きところ」と捉えている部分に注目させる。	関 自分の意見をふくらませ、他者の意見との異同を理解しようとしている。(観察) 読 作品世界のものの考え方を読み取ろうとしている。(観察) 関 必要に応じて質問したりしながら他者の意見を聞き取ろうとしている。
	かぐや姫はなぜ「しばし待て」と言ったのか。		
	○話し合い (小グループ→一斉)	天の羽衣を着ることによって、物思いのない状態になる、つまり天人に戻ることを意味していることを知る。	
	かぐや姫が望んだものは何だったのか。		
	○かぐや姫の思いを確認する。 (小グループ→一斉)	「物思い」とは、情愛であること、かぐや姫が大切に思っているものはその「情愛」であることを、文中の言葉から探る。	
ま と め	5 自分なら天上と地上のどちらを選ぶか考えてみよう。 6 次時の予告をする。 7 自己評価カードに記入する	意見を交流することによって、自分の思いや考えをさらにはっきりしたものにしていく。 ○自分の意見を、理由づけもしながら記入する。 ○班員の意見を聞き、自分の考えとの異同を確認し合う。(小グループ) ○全体での交流(一斉) テキストの書き手は、地上と天上のどちらがよいという立場に立ってとらえているのかを考えることを提示する。 ○次時の学習内容を確認する。	読 自分の意見をきちんと理由付けしようとしている。(発表・観察)

5 授業での生徒の反応と課題

左に挙げたものは、天上と地上の良さを想像した時の生徒のノートの一例である。本授業では、自分なりに天上と地上を想像し、それぞれの特性を確認した上で、では自分はどちらの立場をよしとするのか、という自分自身の考えを明確にさせようとした。学習者は

竹取物語	
天上派	・長生きしたい 天でもそれなりの感情なくしたい 感情あり
	・人の死に会いたくない
	・薬バラタイスは快癒
	・病気なし 桑に生きる
地上派	・きれいな景色はこわい
	・感情はないのはさびしい
	・何もなくなるとなら地上で死
	・突いた味覚 永遠の命は意味がない
	・地上からバラタイス
	・苦痛をのりこえて強くなる
	・今のままで十分
	・天ではまじかに来し
	・バラタイスを感じない
	・大切なものは天では失つ

自分の想像を巡らして天と地を思い描き、その利点を探っていく。天上では死や病気がない、苦しみもない、ということとを文中から読み取り推測している。

そして、そうした「天上」との比較の中で、「地上」には死や病があることを再認識していったのではないか。この段階ではすでに「天上では死や病がないと同時に地上の感情も消えてしまう」という本文を読んでいるので、そこへの思い（感情がないのは寂しい・地上で大切にできたものを天では失うことは嫌だ）といった意見が多くを占め、天上界を否定的に見る傾向が強くなっていったと思われる。そして改めて自分自身が生きる地上世界の良さを認識していったようである。

その後、自分の意見をもとに、小グループでの話し合いを行った。生徒の反応としては、はじめから「地上」をよしとする向きが多かった。それは前時の学習の中で「天の羽衣」「壺なる御薬」の説明をしてしまったことに起因しているかもしれない。大半の生徒が、「地上の方が感情があってもおもしろい」「地上でやりたいことがある」といった意見を出しており、消極的ではあるが「地上の生活に慣れている」「家族と別れたくないから」という意見も見られた。同じ地上派の意見であっても天上を否定する形での意見表出もあり、「天上では感情がなく楽しくない」「今の暮らしを忘れてしまうのはいやだ」といった点で地上を良しと受け止めている。また、少数ではあるが天上派もあり、その意見は「不老不死」に言及しているものが大半である。

その話し合いの中で、自分の持っていた意見を人の意見によって覆される体験も繰り返されていたようである。他者の意見を聞き、そこからまた思考を深めていって、最終的に自分の考えを変えていった様子が見られた例を次に示してみる。

天上派だったときの意見

- ・ 不死なる薬があつて死なないなら、いつまでも生きていられて好きなことが何でもできる。

班の話し合いの状況

- ・ (天上派) 地上に来ることもできるし、不老不死になれるから。
- ・ (地上派) 感情がなくなつたらおもしろくないから。

天に行くとか家に帰れなくなるし、おもしろくなるから。

地上派に変わったときの意見

- ・ 感情がなくなつたら人間じゃなくなるようなものだし、いつまでも普通でいたいから。

「死」を考えよう、とストリートに問いかけているわけではない。

しかし、「不死の薬」という形で竹取物語が投げかけているこの問題を、学習者はきちんと読み取り、受け止めていると思われる。はじめはその受け止めは浅く、ただ死なないことをよしと考えているようであるが、他者の意見を聞き、自分の中で咀嚼していく中で、死と引き替えに得るものがあることに気づいていつている。特に最初は表現していない「感情」という言葉が、話し合いの後に表出していることから、話し合いが本生徒の気持ちを変えるきっかけになっていることを見て取ることができる。この生徒は、最後の「情愛のない世界を想像してみる」課題の後の感想に、次のように記入している。

何も感じる事ができない世界は絶対にはやだと思いました。今はおいしい物を食べたらおいしいとかそういうのはあたり前だけど、情愛を感じられないのは逆につまらなさにつながるんじゃないかとも思いました。苦しさをのりこえて楽しさがあるから、その感情を大切にしたいです。

はじめは死をはじめとする困難から逃れることが良いと感じていた生徒であるが、その苦しさよりも情愛（感情）のないことの方がつらいのではないかと考えるに至つたのである。

似たような例は、他にもみられる。

地上派だったときの意見

- ・ いろいろな感情を持ちたいから。

班の話し合いの状況

- ・ (地上派) の「つらいことを乗りこえてつよくなる！」という意見に、なるほど！と思った。

- ・ (地上派) の「今のままでじゅうぶん幸せだから」という意見は、とてもいいなと幸せな感じがありました。

情愛のない世界をどう思うか

- ・ とてもつまらないと思う。愛は自分自身のものであつて、他人にとつても大事なものだから、それがないと人生というものができていないから。

この生徒ははじめから「地上派」の立場でものを考えていたが、

同じ「地上派」の他者の意見を聞き、自分とは違ったとらえ方をしているということに対して肯定的な受け止め方をする（なるほどと思つた・とてもいいな等）ことで、自分の考えを広げていくことができたのではないかと思われる。自分と違った受け止め方があることを知る体験が、その後の感想を多少なりともふくらませているのではないかと思われる。

他にもこの「情愛のない世界を考えてみよう」という問いかけに対しては、以下のような反応が見られた。

- ・ 静かな世界。人間どうして支えあつていけない。がんばって行こうという気がしない（もし失敗などしてはげましてくれなかったら、結婚もろくにできない）。
- ・ 人と人との関わりがなくなつてしまつて、毎日が一人一人決まつた生活になつてしまふ楽しくない世界。
- ・ 友達や家族の愛がなくなつたら、助けられることもなくなると思うし、協力し合うこともできなくなると思う。
- ・ 自分勝手に生きていても楽しくないと思う。
- ・ 愛がなくなつたら、私たちも生まれていないので、とてもさびしいと思う。
- ・ 自分への愛がなかったら生きていらないと思う。
- ・ みんなの愛があるから、安心して生きていくんだと思う。
- ・ 嬉しいことも悲しいことも何も感じられず、ただ時間だけが経過していくだけの世界。
- ・ お互いにお互いになつてもあやまることのないし、人に優しくしようとする思いもなくなつてしまうので、人とのコミュニケーションが無くなり、楽しくない世界になつてしまふと思う。
- ・ とつてもつまらないと思う。愛は自分自身のものであつて、他人にとつても大事なものであるから、それがないと人生というものができていないか

ら！です。

・ 人に出会つても何も感じず、困っている人がいても話を聞こうとしない。そんな世界だったら何もしゃべらず自分のことにも興味がない（動きただの人形みたい）。

・ 何かすごい大変なことがあつてもどうでもいいと思うような世界で、心、思いやり、感情がすべてなくなつてしまつて、何事にもやる気を出さないで、自分の感情がすべてどうでもいいに集中してしまうような世界。

この課題に取り組む中で、学習者は自然に「情愛」というもののどのようなものを考え深めていくことができたように思う。それは「感情」であつたり、「協力」であつたり、「うれしいとか悲しいとか感じる心」であつたりといった表現で示されているが、ストレートに「家族や友人、ひいては自分自身への愛」と示されたものもある。

学習者の中には前時までの学習によって、既に「地上は有限の世界である」と認識づけられている。本時の取り組みによって、「有限の生」の後に「死」が約束されていても、そこにある「情愛」のすばらしさを感じるからこそ人はこの世界を生きていけるのではないか、という竹取物語からの問いかけを、自分自身の問題として考えていくことができていのではないかと思う。これがこの学習で目標とした「古典世界が投げかけている「情愛」の問題が現代社会にも通用する問題であることを知る」ということにつながっていると考える。今後この学習を通して「死生」についても多少なりとも意識し、自分の生き方を振り返ることができているのではないだろうか。

また、少人数の班で話し合うことによって自分の意見を変えていく姿が、授業展開の中で多く見られた。他者の意見によって自分の気持ちを揺り動かされ、意見を変えていくことで視点は確実に広がっていったように思われる。こうした体験は決して古典教育に限って効果があるというわけではないが、古典教材を用いて思考の幅を広げていくことの可能性を示しているのではないかと思っている。中学一年生であっても、古典教材を読むことによって自分の「死生」や、それにまつわる大切なものについて考えていくことの可能性を示すことができたのではないだろうか。

6 おわりに

中学生と古典とをどのようにつなげていくのか、という点に関してこれまでもいろいろ考えてきたが、学習者にとって「古典」が自分の遠い世界の絵空事のようにとらえられてしまつてはならないと考える。たとえ時代はさかのぼっていても、そこに人間の「生」の営みがあり、煩惱や苦悩がたしかにあったことを気づかせたい。そうした問題は決して人ごとではなく、自分にも今まさに降りかかっている問題であるということに気づけば、この問題が決して自分だけのものではないことにも気づくことができるであろう。

ただ、授業の進め方の課題として、授業者の中の「地上がよい」という思いが前面に出すぎたきらいが強く、天上をよしとする意見を出しにくい雰囲気があったのではないかと思われる。そうした点で学習者が様々な面で思考を繰り返し、反問し、そうして導き出し

た結論とはなりにくかった。また、生徒の中に「死生観」という意識が明確になったかという点、それもまだ不十分であり、今後、年間を通して、ひいては3年間を意識して継続的に「死生観」を捉えた学習を展開していかなければならないであろう。様々な面から「死生」を突きつけることによって、学習者も意識的また無意識に自分自身の「死生」と向き合っていくことができるのではないかと思う。今回の授業は今後の授業のあり方を考えていく一つの実験授業であったと思うし、今後も研鑽を積んでいかなければならないと考えている。また、本授業は小グループという一つの学習形態を用いた実践であるが、その方法を用いていかに学習者に問題を突きつけ考えさせるか、そうした授業をいかに構築していくか、ということを意識し続けていくことも、今後の大きな課題であろう。

7 引用参考文献

- 中央教育審議会答申
- 中学校学習指導要領 国語編
- 小学校学習指導要領 国語編
- 東京書籍 『新編新しい国語』 一～三年
- 学校図書 『中学校国語』 一～三年
- 三省堂 『現代の国語』 一～三年
- 教育出版 『伝え合う言葉 中学国語』 一～三年
- 光村図書 『国語』 一～三年
- 天沼香 『日本精神史としての『死生観』研究序説』 『東海女子大紀要』

22 『二〇〇二年

竹村信治「翁の物語としての『竹取物語』―「古典」に親しむために―」『国語教育研究』第四十五号、広島大学国語教育会、二〇〇二年三月

佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『学び合う共同体』東京大学出版会、一九九六年五月

佐藤学『学力を問い直す―学びへのカリキュラム―』岩波ブックレット、二〇〇一年一〇月

田中孝彦『生き方を問う子どもたち』岩波書店、二〇〇三年五月

(広島市立美鈴が丘中学校)